

近世在方町の町・宿呼称の変化について

渡 辺 浩 一

はじめに

町奉行支配地の町方に対して、代官・郡奉行支配地の在方（村方）における都市的な場の問題を考える際に、重要な問題の一つとして町・宿呼称の問題があるように思われる。本稿では、第一に、現在見いだしているいくつかの事例を紹介して、在方の町・宿呼称には、大雑把に言って、公儀、個別領主、地域社会の三つのレベルに分けて考える必要があることを示す。第二に、三つのレベルのうち公儀レベルの町呼称について全国的にどれくらい、「町」「宿」を軸とした呼称変更が存在するかということを紹介したい。

一、事例提示

（１）奥州安積郡郡山・安達郡本宮（二本松藩領）

一八二四年（文政七）に奥州安積郡郡山村上町と郡山村下町が、郡山宿上町・郡山宿下町に名称変更されることになった。このことについては、拙稿で経過や意義について論じたことがあり、願書の主要部分についてはすでに引用

近世在方町の町・宿呼称の変化について（渡辺）

しているので、ここでは次の史料を紹介しておく。

覚

郡山本宮兩所ともに是迄村名ニ候処、往還筋人馬繼駅ニも有之、積年商人共相励殊ニ近来売駄手広ニ相成專出精之処、村名ニ而ハ諸国融通差支も有之趣ニ付、以来兩所共ニ村名相止、人馬繼並地方之無差別、宿町之唱ニ可致候事

右之通公辺御伺茂相濟被 仰出候間、代官中トも被申達、村役人並小前之もの迄夫々可被申渡、以上

申閏八月

郡代中 郡奉行中⁽³⁾

このように宿駅であつて人馬の継ぎたてを行なっていること、それに商業活動が活発であることを理由に、村名のままでは「諸国融通」に差支えるとして、村名を止めて「宿町之唱」にすることを命じている。この論理は、拙稿で引用した願書と同じである。

こうした名称変更に伴つて、旧村役人の名称が、名主は検断に、組頭と目付は町目付に、長百姓は長町人に改称され、さらに検断の上には町年寄が新設された。二本松城下町の町役人と同じ名称になったのである。また、小前百姓も「一、公辺江相拘候義者勿論、郡山宿何町町人⁽⁴⁾与相唱可申事」との藩からの指示にあるように、町人と称することとなった。

さて、本稿の関心からすれば、先の引用史料なかで気になるのは「右之通公辺御伺茂相濟」の部分である。これを考えるための史料を掲げる。

(前略) 然ルに(文政七年―引用者注、以下同じ) 正月下旬江戸表丹羽門十郎公より申来る旨は、公儀向手寄を

以内意伺しに甚重き事也、

御前の御直願にて

公儀へ訴、御老中讃談之上筋々

御聞に達し、御聞届相成上ハ□ 公儀の御記録ハ勿論、寛永二十年御入封之砌御預の郷村帳迄從 公儀直し下ケ
らる事にて中々容易の事ならず(後略)⁽⁵⁾

これは、郡山の名称変更の経過を事後そう離れない時期に書き記した長大な史料の一節である。内容があまりにも興味深く、全面的に信頼しうるかどうかは心もとないが、ここでは、藩主が將軍に直願して老中の審議を経て決定される事柄であり、丹羽氏が二本松に入部するときに預かった「郷村帳」も訂正して再交付されることとなるので、郡山村を郡山宿にすることは難しいという情報、郡山の名主に伝えられているのである。ここの「郷村帳」とは、領知朱印状・判物に添付される領知目録のことであろうか。

同じ史料からこれに關係する部分を引用すれば、

一、申(文政七年)八月八日(丹羽)門十郎士江戸表より下られ町名願公儀者相済のよし永戸の内話にて承る幕府の許可が下りたことを郡山の名称変更願を仲介していた郷士永戸與次右衛門から名主が聞いたというのである。以上から、細部には疑わしい部分があるものの、幕府の許可が必要であることは言えそうである。次に領知目録を調べてみると、『寛文朱印留』では「郡山村」⁽⁶⁾、貞享元年領知目録でも「郡山村」であるが、天保一〇年領知目録になると「郡山宿」⁽⁷⁾に変わっている。「郷村帳」の変更が必要との先の史料の記述を裏付けているかのようである。最後に、国絵図に伴う郷帳の方を見てみよう。『天保郷帳』⁽⁸⁾では、確かに「古者郡山村 郡山宿」、「古者本宮村 本宮宿」とあり、「諸国郷帳」⁽⁹⁾(元禄)では「郡山村」、「本宮村」となっている。この文政七年の名称変更によって郷帳も訂正

されたものと思われる。⁽¹⁰⁾

(2) 羽州村山郡北口村 (新庄藩)

北口村は、同じ新庄藩領の工藤小路村、および幕領の大町・新町・前小路・松橋の四か村とともに、六か村で谷地という在郷町を形成しており、定期市も谷地全体で十五斎市が開かれていた。一七一六年(享保元)に次のように北口町と称することが命ぜられている。

北口町と向後申様ニと被仰付候、村とハ堅無用ニ被仰付候

申(享保元年)ノ後二月九日⁽¹¹⁾

これは、北口村による訴願の結果である。その町呼称公認願いの論理は、横山昭男氏の紹介によれば、谷地周辺の村々における店売の展開を禁止し、店売を北口村の特権とするためには町呼称が必要である、というものであった。そして、のちには、新庄藩は北口村のほか、古口・真室・金山・向町もあわせて新庄の城下以外にも町方を許可し、在方商業の展開に対応して商業を統制しようとした。⁽¹²⁾さて、ここでも『天保郷帳』を見ると、この場合は「北口村」と記されており、郷帳が訂正されていないことがわかる。藩が公認しても、郷帳の記載が変わらないという、先の郡山・本宮とは違う例が存在することが判明した。

(3) 越中婦負郡四方^{よかた} (富山藩領)

四方は、一七三四年(享保一九)時点で百姓四二軒、頭振二八五軒からなる、漁労と富山城下町への漁獲物供給の機能を持つ在方町である。一七三九年(元文四)五月六日、富山藩は四方を「町並」とすることを通達し、同九日町肝煎を任命している。ついで、同年九月には、十村支配から郡奉行直支配とし、「一商売方之儀、何ニよらず他所他国懸組候儀可為勝手次第事」と商業を公認することなどの指令を郡奉行は発している。さらに、翌年には町年寄・長

町人を新設した。この変化の背景として、田中喜男氏は、下層民対策と四方における魚問屋の成立による富山城下町商人との確執を挙げている。⁽¹³⁾ この場合も先の北口村と同様に、『天保郷帳』に「四方町」として記載されているわけではなく「四方村」とある。

(4) 上州山田郡大間々(羽州松山藩領)

この事例はやや複雑であるので、主として長谷川伸三氏の研究⁽¹⁴⁾によって経過を略述したい。まず、ことの始まりは一八二七年(文政一〇)の改革組合村の結成である。当初、大間々を寄場として四三カ村の組合を結成しようとしたところ、山田郡桐原村外一〇カ村が別の組合結成を申し出た。しかし、関東取締出役の意向が通って大間々を寄場とする四三カ村の組合が成立し、同時に関東取締出役より大間々町の称号が認められた。このとき、領主である羽州松山藩の郡方役所に提出した願書が以下に掲げる史料である。

乍恐以書付奉申上候

御領分上州山田郡大間々町役人惣代名主惣右衛門・組頭与市江奉申上候、去亥年五月中関東向為御取締山本大膳様御手代河野啓助様・柑本兵五郎様御手代脇谷武左衛門様御出役有之、今般御改革被仰出候ニ付御趣意書御下書御渡被成、追々御取極向之儀并当町江組合村之寄場可被仰付旨被仰聞、其砌私共江御尋御座候者、大間々之儀大間々町又者大間々村与も書上候儀有之、一事両様紛敷趣被仰聞、旧記等御尋御座候間、右者当所宗門人別御改帳・五人組御改帳ニ者往古々今以大間々町与書上来り、尤御奉行所様并当御役所様江者大間々村与書上候趣をも御答申上候処、猶御出役様方被仰聞候へ、当所儀へ前々之町家殊ニ市立候場所ニ付、此度組合村々寄場ニ有之候上ハ大間々町与書上不苦候旨被仰渡御座候、其節右之段当御役所様江御窺可奉申上之処、右御改革組合村々之内同郡桐原村外拾ヶ村々故障之儀申出申、数日相連れ罷在候故、御窺之儀も相延罷在候、然処当四月中右御取締方御

同役山田茂左衛門様御手附吉田佐五郎様・柑本兵五郎様御手代小池宰助様御出役有之、組合村三拾貳ヶ村御呼出之上、故障申立候村々江者御利解被仰聞、早速故障相済、御改革御趣意諸書物御差図之通相調、則別紙写之通当所之儀も大間々町与書上、組合村々一同調印致、御書物類右御出役様方江差上申候、右之通御差図通大間々町与相極メ書上候間、以来之儀者大間々町或者大間々村与一事兩様ニ不相成様仕度奉存候、何卒以御慈悲右之段御聞済被成下、此上ハ大間々町奉書上候様仕度、此段御聞済奉願上候以上

御領分

上州山田郡大間々町

役人惣代

名主

惣右衛門

組頭

与一郎

御郡方

御役所

右之通前書名前兩所四月廿三日昼時出立にて出府いたし願出申事ニ候、五月十九日取込之中ニて斯筆写置右拾貳ヶ村一件者我等とも御改革御出役中大塚氏江詰切にていろく心配御役人中同様之事ゆへ子孫江書残し置申候、かならずく外江見せ申間敷候、十疋ヶ村之者とも大間々ハ町ニ而無之抔と御出役へも申立候へとも不取上、町与認メ□□申候間、右之通御領主様御願□町与いよく認候やうニ内々ニて願出候事ニ候、⁽¹⁶⁾

ここで注目したいのは、傍線部の関東取締出役の論理である。そこでは、大間々が「前々々之町家」でかつ「市立候場所」であるので、組合村の寄場となった以上は「大間々町」と称してよい、と述べられている。つまり、空間的な都市の実態と流通機能と支配拠点の三要素を挙げている。願書の写のあとの添書部分では、対立している桐原村以下一カ村に対する警戒心が如実に語られていて興味深い。

この願書にもかかわらず、領主羽州松山藩郡方役所はこの町呼称問題について保留し、七月の大間々の町呼称承認の要求に対して、郡方役所は町号不承認の裁決を下す。それに対して八月に大間々は再度願書を提出している。大間々の要求の論理もまた、空間の実態と流通機能と支配拠点の三要素であり、さきの関東取締出役の論理と同じものであった。これら大間々の動きに対して、桐原村以下一カ村は、大間々の町号が不承認であれば同じ村であるのだから桐原村においても商売は可能と主張し、市の開催や村境での売買を行なおうとした。十月になると、大間々の小前百姓（＝「一般町人層」）の突き上げによって再び町号承認を要請し、ここに至って翌一八二九年（文政一二）に羽州松山藩はようやく大間々の町号を承認した。

本稿の関心からここで注目されることは、関東取締出役が町号を承認しているにもかかわらず、領主羽州松山藩郡方役所は承認しないということである。領主は最終的には町呼称を認めるものの、『天保郷帳』を見ると「大間々村」のままになっている。羽州松山藩は天保郷帳作成時に幕府に報告しなかったものと思われる。そのことだけならば、今までに見た羽州村山郡北口町や越中婦負郡四方町と同様である。しかし、ここでは幕府の役人である関東取締出役が主導した村から町への呼称変更が郷帳に反映されないものである。「はじめに」で「公儀レベルの町呼称」という表現をもちいた所以である。「幕府レベル」とのみえない国家的性格を郷帳が持っていることは、これまでの国絵図・郷帳研究が指摘しているところである。⁽¹⁶⁾

(5) 上州吾妻郡布施町(幕府領)

今度は、今までの事例とは逆に町から村への呼称変更である。

乍恐以書付奉願上候

上州吾妻郡布施町役人惣代名主八郎兵衛奉申上候、当町之儀貞享年中酒井河内守様御検地ニ而同人様より御渡被遊候御水帳ニ布施町と有之、其外古書物類都而同様ニ御座候処、如何之儀ニ候哉近年御割付皆済目録等ニ村と御記御下被成候へ共、私共儀町と相心得罷在候間、年々之宗門帳五人組帳諸帳共町と書上来候処、今般國中御絵図面御仕立ニ付、土岐山城守様(頼功、沼田藩藩主)御家来今井五郎作殿御廻村之上、布施村と可致旨被仰渡候へ共、既ニ元禄年中御仕立被遊候御国絵図面ニも町と有之、其外証拠書物御座候処、右ニ相振候而ハ嘆ケ敷奉存、先規之通町と御記被置度旨申上、其段書上置候ニ付、此段御届奉申上候、何卒以御慈悲前書始末御聞濟之上願之通以来布施町ニ被仰付候様仕度奉願候以上

天保八酉年五月

当御代官所

上州吾妻郡布施町

役人惣代

名主 八郎兵衛

羽倉外記録

御役所

(17)

布施は一六八五年ごろの貞享検地以来「町」であつたが、最近の年貢割付状や皆済目録では「村」となっている。しかし、布施の方では「町」と認識している。今回の天保国絵図の調査の際に「上布施村」とすることを命ぜられたが、

元禄国絵図では「町」となっており、かつ証拠書類もあるのでその通りに「町」のままにしてほしい、というのである。町呼称要求の根拠の一つに元禄国絵図を挙げていることが注目される。元禄国絵図の在地社会での機能の一端がここに表れている。町役人は自分の町が元禄国絵図にどのように記載されているか知っており、今までの事例でみたように町呼称が何らかの商業特権と関係するとすれば、また町呼称が地域社会のなかで他の村と自らの村を差別化する機能を有するとすれば、特権保持・差別化の根拠に元禄国絵図が用いられているということになる。

この願は認められず、布施町は布施村となった。年貢割付状や皆済目録という領主発給文書での変更が先行して、国絵図の調査を契機として完全に「村」呼称に格下げされたのである。この点、やはり『天保郷帳』を参照してみると、「古者布施町 布施村」とある。天保郷帳は一八三四年（天保五）の奥付を持つから、年貢割付状・皆済目録での「村」が先行していたため、この願書以前に領主レベルでは「布施村」であり、それが『天保郷帳』に記載されたものと思われる。

(6) 摂津住吉郡平野郷町

研究史上あまりにも有名な在郷町である。綿加工・流通の中心として遠隔地商業を行い元禄期に繁栄した、本郷七町・散郷四村からなる、一七〇六年（宝永三）時点で二六六五戸一〇六八六人の戸口を擁する都市である。⁽¹⁸⁾したがって、今まで取り上げてきた在方町とは大きく性格を異にする。ただ、ここでも国絵図調査が呼称の変化をもたらすので、紹介しておきたい。

当郷町

昔時杭全庄、後田村將軍之御息広野卿之御領地時、広野と云御領地を御名とし玉ふと云伝、後誤て平野と云、然る処九十六年以前（元禄十五）^(左注 朱書)午年御公儀様御絵図に平野庄を平野郷町と被遊候間、向後右之通相唱候様大坂

近世在方町の町・宿呼称の変化について（渡辺）

町奉行様より先御地頭松平美濃守様（柳沢吉保）江被仰渡候事。⁽¹⁹⁾

史料中に「九十六年以前」とあるように、これは一八世紀末の記述であるから慎重に扱うべきである。まず、撰津の元禄国絵図・郷帳の作成年月は大野瑞男氏の論文によれば元禄一五（一七〇二）年二月であり、史料館所蔵の『諸国郷帳』（撰津）の年記によっても確認できるから、この史料が語る年代は合っている。また、諸国郷帳では「平野郷村」となっている。後述するように諸国郷帳の墨による訂正は変化ではなく書き誤りの訂正の可能性が十分に考えられるので、元禄郷帳では「平野郷町」と記されていたとも考えられ、もしそうであればこの点も先の史料と合致することになる。天保郷帳にも「平野郷町」とある。ちなみに、平野郷町杭全神社保管文書のなかにある貞享五（一六八八）年五月吉日『今井久右衛門様御下知并諸事書上留帳』（内容年代は元禄四年二月まで）では、代官からの廻状も平野からの願書にも平野は一貫して「平野庄」と記されており、元禄郷帳提出後の時期の『（覚帳）』（内容年代元禄十七年二月〜宝永元年十二月）になると確かに「平野郷町」に変わっている。したがって、引用史料の「然る処」以下は事実と考えてよいだろう。⁽²²⁾

この事例から、国絵図を契機として町呼称が与えられ、そうした契機であるがゆえに公儀レベルから地域社会レベルの場合には在郷町平野の惣町という社会集団にまで通用する呼称であったことが知られる。あるいはまた、このことが事実でなかったとしても、「平野郷町」という名称が元禄国絵図に起源を持つと認識されていることは重要である。しかもそれが由緒書の冒頭に記されている。先の上州布施町の事例と同様に地域社会のなかでの差別化の根拠に元禄国絵図が用いられているのである。⁽²³⁾

以上偶然見いだした六つの事例の検討から、町呼称は、地域社会レベルでの認識・呼称を基底に、個別領主の承認にとどまる場合と、国絵図・郷帳の訂正に到る場合の二つが存在することが明らかとなった。次節では、このうち後

者の事例が全国的にどの程度存在するかを示してみたい。

二、郷帳にみる町・宿呼称の変化

公儀レベルの町・宿呼称を把握するためには、国絵図・郷帳双方の検討が必要であるが、国絵図については調査に時間がかかるため、ここでは郷帳のみを検討対象とする。郷帳のうち、天保郷帳については内閣文庫に献上本が全部揃っているのでこれを用いる。元禄郷帳は、内閣文庫所蔵の一七か国分についてはこれを用いる。また、上野国については東京大学法制資料室所蔵の郷帳を用いる。⁽²⁴⁾その他の国については国立史料館に大和国を除く全国のもが揃っている（史料群番号三七A、史料群名「諸国郷帳」）ので、これを用いる。ただし、史料館本はその性格が確定できないため、参考程度に利用するに止めたい。本来ならば、各国ごとに各種郷帳・関係史料を収集し、比較対照して検討したのちに、本稿の作業を行なうべきであるが、ここでは今後の見通しを得るための全国的概観が目的であるので、上述の史料を用いるのみでも無意味とはいえないと考える。

ここで、史料館本について若干の検討をしておきたい。国立史料館所蔵「諸国郷帳」は、村ごとの石高記載がなく領分記載があるのが特色である。この史料については、伝来経過が不明で、大野瑞男氏によれば近世後期の写本で良質のものとはいえないとされている。⁽²⁵⁾しかし、横田冬彦氏は丹波国の元禄郷帳の検討の結果として、元禄一三年「知行所村高付帳」が「絵図元から各領主への直接の変地照会によって作られた史料であり、正保国絵図・郷帳を元禄郷帳・国絵図へ媒介する位置を占めている」とした上で、国立史料館本は、「内容からいえば、高付帳と密接な関連をもちながら、（京都）府立（総合資料館）本および国絵図の作成過程で成立したもの、もしくはその写」と推定している。⁽²⁶⁾これに対し、渡辺淳氏は、元禄国絵図・郷帳の上納後の「領分附郷帳」の提出を明らかにし、史料館本につい

表 1

上野		山城		国
緑埜		新田	紀伊	郡
笛木町	藤岡町	太田町	東福寺門前	内閣文庫本／東大本
笛木新田 ≧ ≧	藤岡町 ≧ (貼紙)	太田村 ≧ 町	東福寺村 ≧ 門前	聚楽村 ≧ 町 史料館本

表 2

上野	武蔵	山城		国
吾妻	多摩	愛宕		郡
布施町	上石原村	建仁寺門前	千本町	内閣文庫本／東大本
布施村	上石原村 _(町)	建仁寺門前 _(境内)	千本町 _(領)	史料館本
			等寺院村 _(門前)	

て、「文政年間に、元禄郷帳及領分附郷帳（大和国では寛文文帳）を基に、諸地図及諸帳簿を参考資料として作成された『諸国邑名志』⁽²⁷⁾ 或はその作成段階に於ける参考資料」として
いる。

筆者には史料館本の性格について現在のところ結論を得る準備がないので、両説についての当否は留保したい。ただ、史料館本の記載が内閣文庫本とどの程度一致しているのかということを、本稿が関心を持つ町・宿などに限ってのみ以下検討したい。ここでは、山城・武蔵・上野の三ヶ国についてサンプル的に照合した。

史料館本の村名記載は、基本的な記載部分と墨による訂正と朱の注記の三つの部分に分解できる。結論からいえば、基本的記載部分が墨で訂正されている場合には、訂正された方が内閣文庫本と一致する。例えば、山城国葛野郡聚楽町は史料館本では「聚楽村」とあって、内閣文庫本では「聚楽町」となっている。その他の例の一部は表1に掲げておいた。次に、朱の注記の場合は、元の基本的記載が内閣文庫本に一致する場合と、朱の注記の方が内閣文庫本と一致する場合とに

分かれる。表では朱の注記は「」で表している。先の表の上野国緑埜郡笛木町の例が前者である。表2に他の例の一部を掲げる。

この程度の検討では何とも言いがたいが、この結果から、後掲の別表では、基本的記載が墨により訂正されている場合には、訂正された方を採用している。その他の場合の基本的記載についても、天保郷帳の「古者」という注記と一致する場合が多数見られるので、全く信用できないというわけではない。別表に「諸国郷帳」の基本的記載も盛込んだのはそのためである。⁽²⁸⁾

さて、別表を見てみよう。別表は、今まで述べてきた史料から判明する在方町の呼称変化である。まず、表の紹介の前にこの表を作成するにあたって注意した点を述べておきたい。郷帳には、その性格から当然高付けされていれば城下町も記載される。そうした城下町で村から町、あるいは町から村に呼称変化するものは除外した。また、時として在町・在郷町と言われることもある町奉行支配の港町・商業都市の呼称変化も、「はじめに」で規定した在方町の概念からはずれるので除外すべきであろう。それは、秋田藩土崎湊・越中氷見・近江長浜の三例であるが、参考までに別表には載せておいた。さらに、一つの在方町が幾つかの村に別れて記載されており、そのうちの一つの村の呼称が町に変化した場合は、一例として扱うことにする。近江の日野、遠江の原宿がその例である。原宿の場合は、元禄から天保の間に町から宿への変化が一例、町のままであったものが一例と捉えることにする。日野の場合は三例と数えている。これは郷帳記載の村・町・宿が実態そのものではない側面を含んでいることは確かであるが、現実の社会集団やその意志と無縁に呼称が変化しているとは言いい切れないと考えるからである。例えば原宿内の原町と大塚町は実態としてもそれぞれ独立した社会集団と捉えられるということである。そのほか、郷帳記載の村名の性格について留意した点は、例えば元禄郷帳に記載されない枝郷の町が、天保郷帳になると記載される場合は、別表に掲出しな

ったということである。このような場合は別段一つの社会集団の呼称が変化したとは考えられないからである。

最後に、別表の紹介を簡単にしておきたい。まず、元禄以前の变化について語れるのは武蔵国と上野国である。武蔵国は「武蔵田園簿」と内閣文庫本元禄郷帳との間で合計四一例あり、このうち村から町への変化が一八例ある。逆に町から村への変化も一八例ある。上野国は寛文と元禄の間に、町から村が一例、村から町が四例である。さらに、内閣文庫本元禄郷帳に「古者」の記載があることから判明する呼称変化は、駿河四・信濃三・越後一の合わせて一例ある。そのほか、「諸国郷帳」に「古ハ」⁽³⁰⁾とあることからわかる例は播磨四・近江三・筑前二、陸奥・但馬・阿波各一で計一三例存在する。

次に、元禄から天保への変化については、元禄と天保の内閣文庫本の比較で確定できるものが八〇例、内閣文庫本天保郷帳の「古者」の記載から判明するものが一九例、史料館本元禄郷帳と内閣文庫本天保郷帳の比較から抽出した例が三二ある。

以下、諸国郷帳による例を除外して考えてみても、国別に見ると、武蔵が二一例と群を抜いて多く、町から宿への変化一四例が目立ち、ついで町から村への変化が七例となっており、元禄以前とは呼称変化の様相が変容している。町から宿への変化は、他に伊勢・三河・遠江・駿河・相模・上野において合計二四例見られ、武蔵の一四例も含めてその全てが五街道もしくはその附属街道の宿駅である。元禄から天保への宿駅における町から宿への変化については一つの傾向として指摘できそうである。⁽³¹⁾

以上で別表の紹介を終える。

むすびにかえて

一節で紹介したような、在方町の呼称変化の事例が決して特殊・例外的なものではないことが、本稿では明らかに
なつたと思われる。郷帳に表れるだけでもこのように多数の事例が存在するのである。一節で紹介した郷帳に反映さ
れない個別領主レベルの事例も含めると在方町の呼称変化は膨大な数になるものと思われる。したがって、在方町の
呼称変化を検討していくことは、あらためて近世社会における村とは何か、町とは何かということを考える素材にな
りうるのではないかと考えられる。

〔注〕

- (1) この問題については、既に矢田俊文氏が「民衆の地域認
識」としてのマチ・ムラ呼称を取り上げている（『本願寺
教団の裏書からみた16〜17世紀における地域認識』『環日
本海地域比較史研究』一、〈新潟大〉一九九二年）。
- (2) 渡辺「近世後期における在郷町共同体と藩権力―文政七
年郡山町昇格をめぐる一―」（『日本文化研究所研究報告』
別巻二四〈東北大〉、一九八九年）。
- (3) 郡山上町今泉家文書、郡山市歴史資料館収蔵。読点筆者、
以下同じ。
- (4) 前掲拙稿、史料2。
- (5) 前掲今泉家文書「町昇格一件」、『本宮町史』五（本宮
町史編集委員会、一九九二年）に一部掲載。

近世在方町の町・宿呼称の変化について（渡辺）

- (6) 国立史料館編『寛文朱印留』上（東京大学出版会、一九
八〇年）、五〇頁。
- (7) 『福島県史』一〇上、六および九頁。
- (8) 『内閣文庫所蔵史籍叢刊』五五・五六（汲古書院、一九
八四年）。
- (9) 国立史料館所蔵。
- (10) 天保郷帳の作成過程については、藤田寛「国高と石高―
天保郷帳の性格―」（『千葉史学』四、一九八〇年）、杉本
史子「天保国高・国絵図改訂事業の基礎過程」（『人民の歴
史学』一〇六、一九九〇年）。また、元禄郷帳の直後に幕
府に提出された領分附郷帳の存在とその改訂使用が明らか
にされている（渡辺淳「元禄郷帳徴収について」『海南史
学』二四、一九八六年、杉本史子「国絵図研究の位置と課

- 題『日本歴史』五二九、一九九二年。杉本論文(九二年)の注(20)史料によれば、領分附郷帳は所替がないかぎり訂正されないと考えられるので、ここの郡山・本宮の場合には天保郷帳作成時に訂正されたと考えてよいであろう。
- (11) 河北町誌編纂資料第四八輯、今田信一編輯『戸沢藩御触書果纂』第五集(河北町誌編纂委員会、一九七五年)
- (12) 横山昭男『近世の定期市と商品流通』『西村山地域史の研究』六、一九八八年、同『近世在方市の展開と商品流通』『地方史研究』一八五、一九八三年、『河北町の歴史』上巻(河北町誌編纂委員会、一九六二年)四七四〜六頁。
- (13) 田中喜男『近世在郷町の研究』(名著出版、一九九〇年)、『富山県史』史料編五(一九七四年)史料番号五六八・五七〇・五七一。
- (14) 長谷川伸三『近世農村構造の史的分析』(柏書房、一九八一年)、津田秀夫「大間々町の町号一件について」『群馬文化』七八・七九合併号(一九六五年)。
- (15) 大間々町長沢家文書No.九三。
- (16) 今まで挙げてきた諸論考のほか、川村博忠『国絵図』(吉川弘文館、一九九〇年)および同書巻末参考文献所載の諸論考。
- (17) 本多夏彦「町から村へ」『新治村史料集』四(新治村村誌編纂委員会、一九六二年)二九一頁。
- (18) 『新修大阪市史』大阪市史編纂委員会、一九八八年。
- (19) 「雑記」(『日本都市生活史料集成』一〇、学習研究社、一九七六年、三〇二頁)読点は史料集のもの。
- (20) 大野瑞男「国絵図・郷帳の国郡石高」『白山史学』二三(一九八七年)。
- (21) 国立史料館架蔵マイクロフィルム。
- (22) 延宝四年四月「摂州村々高書写」では、『関西学院史学』一(一九五二年)の翻刻によれば「平野村」とあるが、『大阪府の地名』(平凡社、一九八六年)巻末の一覧表によると「平野町」となっている。原本未見のため保留としておきたい。
- (23) 由緒や差別化といった問題については、大友一雄「近世の献上儀礼にみる幕藩関係と村役」(『徳川林政史研究所研究紀要』二三、一九八九年)などから学んだ。
- (24) 丑木幸男編『上野国郷帳集成』(群馬県文化事業振興会、一九九二年)によった。また、同書には寛文八年郷帳(国立公文書館内閣文庫蔵)も翻刻されているので、それも別表に利用させて頂いた。
- (25) 注20論文。
- (26) 横田冬彦「元禄郷帳と国絵図」『文化学年報』(神戸大学)四、一九八五年。
- (27) 渡辺淳「元禄郷帳徴収について」『海南史学』二四、一九八六年。
- (28) 横田氏前掲論文は、史料館本丹波国郷帳について朱の注

記は正保国絵図記載の村と村名とする。もし史料館本の全てがそうであれば、正保国絵図記載の村名を全国で復元できることになる。しかし、ここでの検討のように基本的記載自体が内閣文庫本と一致しない以上、丹波国以外に横田説を適用するわけにはいかない。

(29) 塚本学「村と村民の生き方」(同編『日本の近世』八、中央公論社、一九九二年)

(30) ちなみに、今までの研究のなかでは、元禄国絵図によって浦などの多様な呼称が村へ実際とは関係なく統一されることが指摘されている(川村博忠「江戸幕府撰国絵図の研究」(古今書院、一九八四年)、黒田日出男「現存慶長・正保・元禄国絵図の特徴について」『東京大学史料編纂所報』一五、一九八一年)。また、深井甚三氏は、正保国絵図と元禄国絵図の間で町から村への変化が加賀国に八例、越中国に一二例存在することを指摘している(深井甚三「近世前期における加賀藩の町・町役・町人」『富山大学教育学部紀要』(A)三二、一九八四年)。

(31) こうした宿場町・在郷町の呼称について言及したものに、丸山雍成『近世宿駅の基礎的研究』第一(吉川弘文館、一九七四年)三二―三四頁、同『日本近世交通史の研究』(吉川弘文館、一九八八年)二三六―四二頁、吉田伸之「日本近世の交通支配と身分」(『中世史講座』三、学生社、

一九八二年)、前掲深井論文、田中喜男「近世在郷町の研究」(名著出版、一九九〇年)、前掲矢田論文、土田良一「近世宿駅の呼称と宿高」(『鹿児島短期大学研究紀要』四九、一九九二年)がある。

(付記) 上州大間々長沢家文書の利用にあたっては、国立史料館の丑木幸男氏のご紹介で滝沢典枝氏(群馬県史編纂室)にお世話いただいた。また、羽州村山郡北口村の史料については横山昭男氏(山形大学)のお手を煩わせた。記して感謝する次第である。

〔追記〕 本稿脱稿後、岸上幸士「摂津国元禄郷帳」(『地域史研究』六五、尼崎市立地域研究史料館、一九九二年二月)を知った。岸上氏は柿衛文庫蔵摂津国高附帳が幕府に国絵図とともに提出された元禄郷帳の写本であることを確定されたので、本稿の付表には岸上氏の翻刻を用いるべきであった。したがって、付表の摂津国の欄から昆陽村を削除し、元禄の東成郡北平野村・南平野村が天保ではそれぞれ町に変化したことを加え、さらに事例としてとりあげた住吉郡平野郷町が元禄郷帳では「平野町」と記載されているというように訂正したい。

別表：郷帳にみる在方町の呼称変化

国	郡	元禄	天保
山城*	愛宕 綴喜	鞍馬口町 郷口上町 郷口下町	村 上町村 下町村
大和*	〔寛文7年〕		
	添上	川上町	村
	葛上	御所村	町
	吉野	吉野分	吉野山 古者一町
河内	茨田	守口村	守口町 古者一村
摂津	嶋下 河辺	茨木町 崑陽村 古者崑陽宿町	村
伊勢*	鈴鹿 河曲 飯野	石薬師町 野町新田 白子村之内 伊賀町	宿 野町 伊賀町村
三河*	額田 宝飯 設楽 渥美	藤川町 御油町 赤坂町 野田町 二川町	宿 宿 宿 村 宿
遠江*	榛原 佐野 山名 磐田 豊田 敷知 浜名	金谷町 日坂町 原川町村 袋井町 見付町 中泉町 舞坂町 新居町 白須賀町	宿 古者一町 宿 古者一町 原川町 宿 見附宿 古者見附町 村 宿 宿 宿
駿河*	志太 有渡 庵原	島田町 岡部町 入江町 古者七日市場 九子町 江尻町 古者三日市場 興津町 中宿町 古者中宿村 油比町	宿 宿 町 宿 宿 宿 町 由比宿

(駿河)		蒲原町	宿	
	富士	吉原町	宿	
	駿東	原町	宿] (原宿)
		大塚町 古者大塚村	町	
甲斐*	巨摩	若神子新町	若神子新町村	
伊豆*	加茂	下田村	町	
相模*	三浦	三崎村	町	
	鎌倉	上矢部村	町	古者矢部村
		戸塚町	宿	
		藤沢大鋸村	町	
	高座	藤沢坂戸町	村	
	海老	大磯町	宿	古者一町
〔武蔵田園簿〕				
武蔵*	多摩	上高井戸町	村	
		下高井戸町	村	古者高井戸村
		小野路町	村	
		駒木野村	上長房 駒木野宿	宿
		上長房村	上長房 小仏宿 町共	上長房村古者小仏宿
		横山町	八王子共横山町	横山宿
		青梅町	村	古者一町
		今寺村	青梅新町	青梅 新町村
		伊奈宿	村	
		上石原町	村	宿
		下石原町	村	
		小島分町	村	
		上布田町	村	
		下布田町	村	
		国領町	村	宿
		門前町	村	
	橘樹	保土ヶ谷村	町	
		岩間村 (久良岐郡)	町	
		神奈川町	町	宿
		川崎砂子村	町	
		川崎小土呂村	町	
		溝ノ口町	村	
		諏訪河原町	村	
	豊島	中村	千住町組中村町	町
		小塚原村	町 (千住町組)	町

(武蔵)	岩淵町	岩淵本宿	宿
足立	浦和町	町	宿村 古者浦和町
	大門村	町	町
	上尾町	町	宿
	桶川村	町	宿
	日出谷村	下日出谷町	町
	石戸町	町	石土宿村 古者石戸町
	鴻巣町	町	宿
	鳩ヶ谷町	町	宿
	川口村	町	町
	掃部新田	掃部宿町	宿
入間	大塚町	村	村
高麗	中山町	村	村
比企	小川町	村	村
埼玉	糟壁町	粕壁町	宿
	越谷村	町	宿
	久喜之郷	村	町
	羽生町場	町場村 古者羽生町場	町場村
榛沢	深谷村	町	宿
児玉	本庄町	町	宿
加美	七本木町	町	村
秩父	安戸町	村	村
	小鹿野町	上・下小鹿野村	村
荏原	六郷八幡塚町	八幡塚村	村
	世田谷町	町	村
	品川町	北品川町	宿
		南品川町	宿
	蒲田新宿	蒲田新宿村	村
	羽田村	羽田漁師町	町
葛飾	杉戸町	町	宿
	田宮町	幸手町 古者田宮町	宿 古者幸手町・牛村
	上川辺新田	栗橋町	町
上総*	山辺	辺田方村 古八東金町	村
下総*	葛飾郡	松戸村 (町)	町
	相馬郡	片町	村
	匝瑳郡	新町	村
近江	蒲生	武佐村	宿
		日野松尾町 古者松尾村	町

(近江)		日野大窪町	古者日野大久保村	町
		日野村井町	古者日野村井村	町
坂田		長浜村	御伝馬役御免許	町
美濃	羽栗	笠松町	古者笠町	村
信濃*	佐久	春日新町	古者一村	町
		岩村田村		町 古者一村
		平塚村	古ハ塚本新町	村
筑摩		青柳町村	古ハ青柳本町	村
水内		室飯町		村 古者一町
上野*	〔寛文〕	〔東大本〕		
	新田	(なし)	本町	本町村 古者本町
	勢多	山上村 (推定)	山上内町	山上内町村
			山上新町	山上新町村
	利根	新巻町	町	村 古者一町
	吾妻	布施町	町	村 古者一町
		須川町	町	村 古者一町
		長野原村	町	村 古者一町
	碓氷	板鼻村	町	宿
	緑埜	笛木村	町	笛木新町
	甘楽	二日町	二日町村	村
下野*	芳賀	谷田貝村		町
	那須	越掘村 (町)		村 古者堀越町
	安蘇	大臥村		町
	都賀	稲荷川村		外山村 古者稲荷川町
		文挿村		文挾宿
		栃木村 (町)		町
		小山町		大谷郷 古者小山町
陸奥	大沼	八町村	古者八日町	八町村
石川		高田町村		高田町 古者高田町村
		下泉町村		下泉町 古者下泉町村
		浅川村		町 古者一村
	安達	本宮村		宿 古者一村
	安積	郡山村		宿 古者一村
	信夫	清水町村		清水町
	刈田	斎川村宿		才川村 古者斎川村

(伊達領には「一村宿」の記載88箇所
あるも疑問のため省略)

出羽	村山	左沢村	町	
	秋田	土崎湊新田村	湊町	古者土崎湊新田村
	雄勝	横堀村	町	
		湯沢村	町	
能登	平鹿	増田町	村	古者一町
	羽咋	志雄村	町	
	鳳至	河井村	町	
		宇出津村	町	古者一町 ・宇出津山分村
越中	珠洲	飯田村	町	
		正院村	町	
	新川	滑川村	町	
		住吉村枝郷魚津町	住吉村	古者魚津町 ・住吉村二ヶ村
	射水	氷見村	町	
	礪波	杉木村	杉木村	古者杉木村 ・杉木新町貳ヶ村
		杉木新村		
		清水村	清水村	古者清水村 ・津沢町貳ヶ村
越後*	刈羽	津沢村		
		石地町	村	古者一町
		尾町	尾町村	古者尾町
	蒲原	三条町 古者三条出作村	町	
佐渡	雑太	戸地炭村	町	
		相川村	町	
		沢根村	町	
		五十里籠村	町	
但馬		五十里炭屋村	町	
	養父	町村 古者建屋町	町村	
	七味	百姓町	村岡町	
伯耆	河村	松崎村	町	
	日野	多里村	宿	
播磨	美囊	中村 古者中村町	村	
		淡河村 古者一町	村	
	加古	寺家村	町	
	印南	志方西町 古ハ志方村	町	
		志方東町 古ハ志方村	町	
	多可	船町	船町村	

(播磨)	宍粟	三方村	町
安芸	佐伯	草津村	草津町屋敷 古者草津村
紀伊	伊都	橋本町	村
	日高	御坊町	村
	牟婁	本宮	本宮村
阿波	阿波	市場町 古ハ古市村	町
	麻植	川島村	町
筑前	遠賀	芦屋村 古ハ一町	蘆屋村
	嘉麻	千手町 古ハ千手新町	村 古者一町
筑後	山門	瀬高上庄町	村 古者一町
		瀬高下庄町	村 古者一町
		原町	原町村 古者原町
	三池	江浦町	村 古者一町
		三池町	村 古者一町
豊前	企救	馬寄新町	馬寄新町村
		式十町	式十町村
		葛原町	葛原町村
豊後	速見		辻間村 古者辻間村 ・頭成町
		頭成村	
肥前	神崎	境原村	町
	佐嘉	上加瀬町	町 古者一村
肥後	合志	竹迫村	町
日向	宮崎	花ヶ嶋村	町

- 注1 在方町の呼称変化の事例が見いだせなかった国の国名は省略した。
- 2 国の配列は、概ね五畿七道の順である。なお*の付した国の元禄の欄には内閣文庫本を用いている。その他の国々の元禄の欄は、国立史料館蔵諸国郷帳による。
- 3 在方町の名前は、原則として左端の初出の場合のみに記し、それ以外は「村」「町」などとのみ記して在方町名を省略した。但し、例えば「原町」から「原町村」への変化という紛らわしい場合には、名前・呼称ともに全て記した。
- 4 大和国寛文7年の欄は、国立史料館所蔵「諸国郷帳」中の文書である。
- 5 下野国越堀村・栃木村に付した（町）は墨の併記をあらわす。